

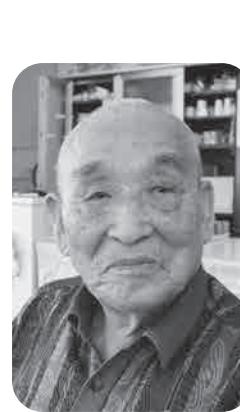
終戦直前の八月一日。約四百トンの「唐津丸」という新造輸送船の船員となり、朝鮮に向けて出航しました。朝鮮で仕入れた石炭を上海で売れば三百倍になるという話でした。

終戦十四日前、足を失う

船員仲間が前借りを一万円くれる会社を見つけた。身を寄せたのは、退役した高級将校たちが作った、海軍の仕事を請け負う会社でした。軍の特権を背景に、物資の闇取引など

戦争末期は船員が不足していたため、船員を闇で斡旋する「周旋屋」という人たちがいました。そこで山口県の会社を紹介され、16歳の私に「前借り」という支度金を三千円もくれました。家が一軒三百円で建つ時代ですから、とんでもない大金です。

16歳で軍属に



釧路市在住
曾我 勇さん
昭和2年生まれ
(終戦時17才)

軍属の船員として戦争を経験した曾我勇さんに聞きました。



戦争で儲ける闇の社会

にいた船長は頭を撃ち抜かれ、血が吹き出していました。近くに爆弾が落ちると、船が立ち上がるかと思うほど衝撃。米軍機はもてあそぶように一機ずつ順番に急降下しては、機銃や爆弾を浴びせています。

そのうちに漏れ出した油が燃え始め火に追われ、仲間と海に飛び込もうとしたとき、「ブスリ」と音がして右の膝がなくなっていました。不思議と痛みは感じませんでした。

私たちの暮らしは潤つていて、三食炊きたての白米、肉や魚も食べられ、給料も驚くほど良い。身分証を見せれば映画も買い物も半額。仲間と遊びにふけることも多く、お金が降つて湧いてくるような感覚で、何も困らない愉快な暮らしでした。

戦争で困るのは一般の人

右足を失った私は、好きだった船員の道を断念。足が無くてもできる仕事を探し、根室で仕立て屋になることにしました。

したが、米軍機は射的で遊ぶように撃ち続けます。近くに着弾するたびに水圧や熱さを感じながら、必死に船から離れました。午後四時頃、ようやく米軍機が引き上げ、海軍の船が救助に来ました。彼らは「島の陰から見ていたが、助けようがなかつた」と謝っていました。

私が救助されたとき、右足を失った私は、好きだった船員の道を断念。足が無くてもできる仕事を探し、根室で仕立て屋になることにしました。

私が救助されたとき、右足を失った私は、好き

だった船員の道を断念。足が無くてもできる仕事を探し、根室で仕立て屋になることにしました。

